日本语言文学论文集

韩建美 主编

同济大学出版社

日本语言文学论文集

江苏工业学院图书馆
藏书章

韩建美 主编

责任编辑　黄国新
封面设计　陈益平

日本语言文学论文集
韩建美主编
同济大学出版社出版
（上海四平路 1239 号）
新华书店上海发行所发行
青年报社印刷厂印刷
开本：787×1092　1／32　印张：10.75　字数：275千字
1997年8月第1版　　1997年8月第1次印刷
印数：1—550　定价：28.00元
IBSN7-5608-1865-X／H・189

序　言

黄弘明

1986年日本学研究室(1988年研究所に改名)設立の際、私達は研究の主旨として、「同済大学の特徴である土木、建築分野の優勢を生かし、日本研究に興味ある教師ばかりでなく、国内外の力も動員し、比較研究により日本研究を中国改革開放に役立たせる」ことを強調しました。設立後、私達はこの主旨に沿って研究してきました。中でも1987年春から二年余り行った"中日建設企業管理の比較研究"(日本総合研究開発機構、通称NIRAの助成、理事長・下河辺淳)は特筆に値します。この研究は国家の改革案として認められ、改革開放に貢献でき、国家教育委員会の1990年度科学技術進歩奨を戴きました。実践は私達の研究の主旨が正しいことを証明してくれました。

時間の推移に伴い、中国の改革開放は深まり、中国の特色ある社会主義市場経済の路線が実行され、最終目標は世界の市場経済に帰着することが明らかにされました。この十年の変化は著しく、歴史の車は前進し、中国、日本、世界、全てが大きく変わりました。中国の改革開放は、前進過程における色々な時代に相応しくないものを無くすか、或いは

黄弘明　同済大学日本語学院院長
日本学研究所名誉所長

少なくし、不都合なものを改めることにより一層の発展を目指すためです。私達の研究はこの一環でもあります。

同済大学も発展しました。近年、大学法人・摂南大学、大阪工大と合作して設立した日本語学院は、今年第一期生を社会に送るようになり、今年度日本国際交流基金が中国で実施した日本語能力検定一級試験で第一位を獲得し、国内外の好評を得たことは誠に喜ばしい限りです。又、今年から日本語学院と日本学研究所とが同一組織に組入れられたことは、教育と研究があいまって発展できる条件を提供したばかりでなく、今後の日本研究に関して後継者を提供し、良い条件を与えてくれました。これを契機に以前、日本学研究所の編集した刊行物『日本学』が二冊で途絶えたのが、この度一新して発行される運びになりました。この刊行物が今後引続がれ、同済大学の日本研究の場、日本討論の場として、皆様の関心と支持を戴き、かつ、私達の研究が改革開放に役立ち、中日両国の相互理解に役立ち、同済大学の日本研究の質が高まることを切に願うと同時に、それに向っての努力を誓います。

1997 年 5 月 10 日

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

内容提要

本书收集了24位中国和日本学者撰写的论文共25篇，分别用中文或日文撰写。论文内容丰富，涉及到日本语言、文学、文化、教育、教学法等多个方面，不仅可作为研究日本语言、文学、文化、日语教学及教学法等方面的学习材料，还可作为参考资料，供广大日语教师及学习、研究日语的同志阅读。

目　次

序言 …… 黄弘明(1)

専門日本語教育の改革について …… 周炎輝(1)

日本語の婉曲表現 …… 吴　侃(13)

陳述と文の成立 …… 張万夫(24)

日本語における文の成立と伝達意思 …… 黄志軍(33)

日语熟语的特征分析 …… 吴惠仙　韩笑(53)

慣用連語と慣用句との比較研究 …… 姚崇永(63)

日本語の漢語について …… 張玉彬(71)

助詞「と」について …… 張玉彬(82)

助動詞「だ」と形容動詞 …… 於　芳(95)

日本語のテンスについて …… 程子香(105)

万葉の風流
——和歌の風流に関する一考察 …… 李宇玲(116)

芭蕉俳諧の文芸性と日本抒情文芸の伝統精神
…… 王建民(139)

法華行者と科学者
宮沢賢治の科学と宗教認識を見る …… 周異夫(153)

森欧外の文学表現と文学性格の一つ …… 朱偉国(166)

「かきつばた」を読む
——井伏鱒二の思想、テーマと手法 …… 韓建美(174)
人生の縮図　人間のうったえ
——水上勉と彼の文学 …… 程海燕(183)
大江健三郎「河馬に噛まれる」試論 …… 藤井明子(205)
委婉和圆滑
——把握我们理解日语的心态 …… 谈建浩(215)
日本語視聴覚の教育について
——低学年および高学年の授業法 …… 朱淑英(220)
類義語のノート
——いい辞書は矛盾の混合体 …… 韓建美(229)
日本における陶弘景の研究
——陶弘景の生活時代 …… 方亚平(240)
试论日本中世禅宗寺院十境的中国文化影响
…… 蔡敦达(254)
日本的技术士与候补技术士 …… 厉仁玉(290)
日本民間住宅会社の経営から受ける示唆 …… 黄弘明(309)
中国の保険事情に関する若干の考察 …… 森正義(323)
后记 …… 编者(333)

専門日本語教育の改革について

周炎輝

一、始めに

専門日本語教育とは、中国の各大学(総合大学や外国語学院や理工系大学)で開設された専門語学として専攻する日本語の教育のことである。例えば、北京大学の東方学部の日本語専攻科、上海外国語大学の日本語学部、同済大学の日本語学院、湖南大学の日本言語・文化学部の日本語教育はこれに当たる。これに対して、一般語学として履修する日本語があり、中国では「大学日本語」といわれている。ここで検討したい問題は後者を含めていない。

中国の専門語学としての日本語教育機関は1950年代の北京大学の1機関から今の百ぐらいの機関まで発展して、教育の質も大幅の向上を見せている。しかし、4年間もかかってただいわゆる「4会」(聞く・話す・書く・読むことができる)の目標に達成するということは大学の教育の成功と言えるでしょうか。

周炎輝　湖南大学日本言語・文化学部教授、同済大学日本語学院客員教授

本稿は、中国の専門日本語教育の歴史を顧みつつ現状を分析し、改革の道を探りたいと思う。

二、歴史と現状

中国では、目本語教育、特に大学の専門語学としての日本語教育は、本世紀の後半期に驚異的発展を遂げたのである。1950年代には専門語学としての日本語教育機関は北京大学の東方学部の中の日本語専攻科のみであった。1960年代には北京外国語学院、上海外国語学院、大連外国語学院などの大学内に日本語専攻科の増設があったが、十校足らずに止どまった。1972年の中日国交回復に伴い、日本語教育はだんだん一つのブームになった。1980年代を経て、1990年の調査によれば、専門語学としての日本語教育機関は81校になり、さらに1993年の調査によれば、98校になったのである。1993年以後は調査はしていないが、百校ぐらいになったと推定できるだろう。

教育目標としては、1950年代の北京大学は主に日本語研究者や教師を養成すると共に通訳を養成することに重点をおいたので、日本語を聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどの能力の養成と共に教養課目や理論課目をも重視していた。1960年代以後に設立した各外国語学院の日本語専攻科は主に通訳を養成することを目標としていたので、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどの能力の向上に専念していた。そういう影響で北京大学の教育目標も技能主義の方向に偏りつつあった。「聞くことと話すことを最優先にして、読むこと、書くことはその後について行く」

という教育方法は各大学や外国語学院の日本語専攻科(外の外国語も同じ)の合言葉であった。その結果、大学卒業生は卒業早々すぐ旅行会社のガイドや貿易会社の生活面の通訳として仕事に臨むことができるが、少し難しい問題や広い知識の要る問題にぶつかると何もかも解決できないのである。結局、ガイドや通訳としても不合格なのである。

1987年に大学十校を選んで日本語専攻科の学生に日本語能力試験を実施して得た結果を見ると、二年の勉強を終えた学生は平均して4745の単語を身につけたということが分かった。それに基づいて1990年に全国大学外国語専攻科教材編修・審査委員会日本語部会による「大学日本語専攻科基礎段階教育大綱」は5500語を二年間の教育の目標としていた。二年間の教育時間数は884ぐらいであるので、一時間に習得する単語数はただ6ぐらいである。これは余りにも不経済である。

教科書としては、1993年の調査によると、「中日交流標準日本語」、上海外国語大学の「新編日語」、東京外国語大学附属日本語学校の「日本語」はそれぞれ三分の一前後を占めている。しかし、「中日交流標準日本語」は中国の日本語学習者の独学のために編修した本であり、その教育目標は日本国際教育協会と国際交流基金が実施している「日本語能力試験Ⅱ級」を目指している。一方、「新編日語」は「大学日本語専攻科基礎段階教育大綱」の所定目標を目指している。これでも分かるように、中国の専門語学としての日本語教育は、目標さえ統一されていない有り様である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

三、教育目標

中国の「大学日本語専攻科基礎段階教育大綱」の教育目標は語学知識と語学技能に分けられて、次のような要点がある。

語学知識

発　　音	発音とイントネーションが正しいこと
文　　字	1607の漢字や仮名やローマ字の綴り方を習得すること
語　　彙	4800～5500の単語の主な意味を習得すること
文　　法	動詞のテンス・アスペクト・相や複文の種類と構造や敬語の一般表現などを習得すること
基礎文型	248ぐらいの基礎文型を習得すること

語学技能

聞くこと	中国の国際放送局の対日放送のニュースを聞いてその内容が60％以上分かる程度
話すこと	日本人と一般的コミュニケーションをすることができる程度
読むこと	辞書を利用すれば「走れメロス」程度の文章を読んで75％以上の正しさで理解出来る程度
書くこと	一時間以内に600～800字ぐらいの文章を書くことができる程度

「日本語能力試験Ⅰ級」の目標は大体1000時間ぐらいの

学習で1万ぐらいの単語と3000ぐらいの漢字や高度な文法知識や語学技能を習得することである。

この両方を比較すれば、学習時間は884時間対1000時間で、ただ116時間の差であるのに、単語数は4800～5500語対1万語、漢字数は1607字対3000字で、かなりの隔たりがある。尚且つ「日本語能力試験Ⅰ級」は全然漢字を知らない欧米人を含めた外国人留学生のために設立した目標であり、中国人にとっては漢字の書き方や意味は覚え易く、発音でも漢音のばあい大体類推することができるから、そんなに難しくないのである。そう考えれば中国の「大学日本語専攻科基礎段階教育大綱」の目標は余りにも低すぎると思う。

四、中国人の特殊性

同じ漢字を使っている中国人は、漢字を全然知らない欧米人に比べれば、割合に日本語を身につけ易いはずである。こういう有利なところを活用して合理的な日本語教科書を作り出して教育を実施すれば，大学2年間の勉強を通じて日本語能力試験Ⅰ級以上のレベルに到達できるだろう。

中国人のための日本語教材を作成するには、まず日本語を学習するばあいの中国人の有利なところと不利なところとをよく分析して教育の目標を決めなければならないと思う。例えば、1945の常用漢字に対し、音読みと訓読みを併せて3000以上の読み方がある。漢字圏以外の人間なら、その漢字の字形や筆順を一々覚えなければならないし、その3000以上の読み方も一々覚えなければならない。そればかりでなく、漢字の読み方が分かっていても、二つ以上の漢

字で作った単語の意味と読み方はまた一々覚えなければならない。その困難さはわれわれ漢字圏の人、特にわれわれ中国人の十倍以上になると思う。漢字の音読みの場合、その大部分が漢音である。現代中国語の共通語の発音は古代中国語とはかなりの違いがあるということは言うまでもないが、漢音の場合、半分以上は現代中国語から類推できる。こういう中国人の利点を活用して、中国人用の基本語彙表に常用漢字の総ての読み方を意識的に盛り込めば、中国人学習者の日本語の単語の習得力や記憶力が大いに上がるだろう。

中国人の不利のところを言えば、西洋人以上のものはまずないと思う。例えば、日本語の文の語順や活用語の活用など、中国人を困らせるところが少なくないが、西洋人にとっても困るところである。しかし、英語と日本語との比較研究などヨーロッパ系の言語と日本語との比較研究は中国語と日本語との比較研究よりかなり発達している。その比較研究の成果を西洋人に対しての日本語教育に運用することができるのに対し、中国人に対しての日本語教育の中に運用できる成果がまだ多くないという事実は否めない。

以上述べたところをまとめて見ると、日本語を習得する場合、中国人は西洋人よりかなり有利なところが多いのである。日本語教科の設計やカリキュラムの工夫、新しい視点に立つ教材の開発などに、こういう利点を考えて進めて行けば、中国の日本語教育はもっと有効に、もっと能率的になるだろうと確信している。具体的な教育目標は改めて検討しなければならないが、一応の目安として、一年と二年の基礎段階の目標については900ぐらいの学習時間で「日本語

能力試験Ⅰ級」の目標を達成することが考えられるだろう。

五、教材開発の構想

以上の目標を達成するためには、日本語教科の設計、カリキュラムの工夫、教材の開発など、検討すべき問題がたくさんあるが、まず教材については、一冊の教科書だけではなく、「基礎日本語教材シリーズ」を開発しなければならない。このシリーズは何種類かの教材を含んでいる。つまり、次のようなカリキュラムが必要だと思う。

	一年上	一年下	二年上	二年下
基礎日本語(426時間)	8×15週間	6×17週間	6×17週間	6×17週間
日本語語彙(98時間)	2×15週間	2×17週間	1×17週間	1×17週間
日本語文法(102時間)		2×17週間	2×17週間	2×17週間
日本語表現(98時間)	2×15週間	2×17週間	1×17週間	1×17週間
日本語聴解(132時間)	2×15週間	2×17週間	2×17週間	2×17週間
日本語作文(68時間)			2×17週間	2×17週間
合計　924時間	14×15週間	14×17週間	14×17週間	14×17週間

具体的には次のような構想である。

「基礎日本語」はこのシリーズの中心的存在であり、日本語の習得に必要な知識を教えると同時に技能訓練の出発点にもなるものである。四つの学期に合わせて4冊に分けられ、第一冊を基本文型訓練中心、第二冊をファンクション中心、第三冊と第四冊を読解中心にして材料を盛り合わせる。単語を6000語以上、特に使用頻度の高い語彙を出来るだけこの教材の中に織り込む。

「日本語語彙」と「日本語文法」は「基礎日本語」をめぐって語学知識を増やすための教材である。しかし、これは言語学の理論課目ではない。必要な理論を教えることは教えるが、あくまでも実践中心の課目である。前者は習得する単語の量を増やすことをおもな目標とする。例えば、「基礎日本語」に出ている日本語の単語の構造、漢字の音読みと訓読みなどの知識を整理して新しい単語を類推したり、覚えたりする練習をする。「日本語文法」は文法知識を教えながら常用単語と文法事項とを結び付けて練習させる課目である。例えば「基礎日本語」が五段活用動詞を教える段階に入ったら「日本語文法」は習得すべき1万語の中から総ての五段活用動詞をまとめて有り得る活用形に変化させて練習をする。

ある：I	①○　あろう	②あり、あった(あって)	③ある	
	④ある	⑤あれば(あったら)	⑥あれ	
II	①あります	②ありません	③ありましょう	
	④ありました			
III	①…がある	②…にある	③…が…にある	
	④…に…がある			
行く：I	①いかない、いこう	②いき、いった(いって)	③いく	
	④いく	⑤いけば(いったら)	⑥いけ	
II	①いきます	②いきません	③いきましょう	
	④いきました			
III	①…へいく	②…にいく	③…までいく	
	④…でいく	⑤…からいく	⑥…をしにいく	

「日本語表現」は口の訓練に重点を置く教材である。「基礎日本語」の本文を巡って仮名の発音・単語のアクセント・文のイントネーション・文章の朗読・対話や口頭発表の演習などの訓練を強めると共に習得すべき単語の量を増やすこ

とも目標のひとつである。例えば、第一冊の最初の部分は仮名の発音の練習に重点を置くのだが、これはただ正しく発音できるということに満足するのではなく、単語の音が自然に口から出るように訓練するのである。日本の放送局がアナウンサーを訓練するとき「レロレロレロレロ…」と口の体操をさせるというような方法も参考することができる。練習する素材は出来るだけ常用単語や常用文型を選択しなければならない。

「日本語聴解」は耳の訓練に重点を置く教材である。「基礎日本語」の本文を巡って、単語・文・文章のヒヤリングを繰り返し繰り返し練習して、常用単語や常用文の音声がでると無意識にでもすぐ意味がわかるように訓練しなければならない。

「日本語作文」は書くことを訓練する教材でする。中国人の識用例や悪文の診断から着手して文章の構造(主題・要旨・段落)や文体・修辞まで学生に知識を教えると同時に作文の実習をできるだけ多くさせる実践中心の教材である。

21世紀向きの新しい教材を作るために最初からコンピューターを利用してマルチメディアの教材を作るのはいちばんの近道であるが、新しい教材に対する中国の大学の切望を考えれば、まず二、三年間で教科書を開発してそれから二年間ぐらいの時間でマルチメディアの教材に改造するという方法も考えられるし、教科書を編修しながらマルチメディアの教材を開発するのも一つの方法である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com